飼料のマイコトキシン規制について

中村 行伸*

Yukinobu NAKAMURA* : Regulation of mycotoxins in Japan

1. 法律の背景

飼料の品質改善に関する法律として、昭和 28 年に「飼料の品質改善に関する法律」が制定され長年運用されてきた。食品の安全性に対する諸問題（石油たん白、カネミ油症等）が提起され、食品の安全性という観点から飼料及び飼料添加物について、その使用が原因となって人の健康をそこなうおそれがある畜産物等が生産されることを防止し、又は、家畜等に被害が生ずることにより畜産物等の生産が阻害されることを防止するための法制度を早急に確立することが要請され、昭和 50 年「飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律」（略称 飼料安全法）に改められた。新たに加えられた点は、

- ① 飼料安全法における対象飼料は、家畜等に給与される飼料全てとした。
- ② 飼料安全法における対象家畜等に、養殖水産動物を加えた。
- ③ 従来、動物用医薬品等として扱われてきた物質を飼料添加物として指定した。
- ④ 飼料及び飼料添加物について安全性確保の観点から規格、基準を設定した。
- ⑤ 有害飼料等の廃棄、回収の命令、販売の禁止の制度を設定。
- ⑥ 飼料の安全性を確保する上で、特に注意を要する飼料等の製造事業場に一定の資格を有する飼料製造管理者の設置を義務づけた。
- ⑦ 飼料の消費者が良質な飼料を選択できるよう原材料名及び配合割合の表示、栄養成分量の表示の拡充等表示制度を充実させた。

2. 飼料及び飼料添加物の成分規格等に関する省令関係

マイコトキシン関係では、落花生油かす又は落花生油かすを含む飼料中のアフラトキシン B₁ の含量について規格が定められている。

法律第 1 条

別表第 1（抜粋）

1 飼料一般の成分規格並びに製造、使用及び保存の方法及び表示の基準

(1) 飼料一般の成分規格 略

(2) 飼料一般の製造の方法の基準 略

(3) 飼料一般の使用の方法の基準

ア 略

イ（ア） 略

（イ） 略

* 農林水産省畜産局流通飼料科（〒100 東京都千代田区霞が関 1-2-1）

Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries (1-2-1, Kasumigaseki, Chiyoda-ku, Tokyo, 100)

表 飼料の有害物質の指導基準（農林水産省畜産局長通達）

単位：ppm

種 類	有 害 物 質 名	対 象 と な る 飼 料	基 準
カ ビ 毒	アフラトキシン B ₁	配合飼料（牛用（ほ乳期子牛用及び乳用牛用を除く）、豚用（ほ乳期子豚用を除く）、鶏用（幼すう用及びブロイラー前期用を除く）うずら用）	0.02
		配合飼料（ほ乳期子牛用、乳用牛用、ほ乳期子豚用、幼すう用、ブロイラー前期用）	0.01
農 薬	ヘプタクロル等 23 品目	省略	
重金属等	鉛等 4 品目	省略	

（ウ）綿実油かすを原料とする飼料は養殖水産動物に対し使用してはならない。

2 落花生油かす又は落花生油かすを原料とする飼料の成分規格及び使用の方法等の基準

（1）落花生油かす又は落花生油かすを原料とする飼料の成分規格

ア 落花生油かすのアフラトキシン B₁ の含有量は 1 ppm を超えてはならない。この場合のアフラトキシン B₁ の定量法は、次に掲げる定量法 A 又は定量法 B によるものとする。

定量法 省略

イ 落花生油かすを原料とする飼料の種類及びその配合割合は、次の表のとおりとする。

飼料の種類	配合割合
鶏用（幼すう用及びブロイラー前期用を除く）飼料	4% 以下
豚用（ほ乳期用を除く）飼料	4% 以下
搾乳牛用飼料	2% 以下
牛用（ほ乳期用及び搾乳牛用を除く）飼料	4% 以下

（2）落花生油かすの使用の方法の基準

落花生油かすのみを単体で使用してはならない。

（3）落花生油かすを原料とする飼料の表示の基準

落花生油かすを原料とする飼料には、落花生油かすの配合割合を表示しなければならない。

注 1：当該落花生油かすの産地はインドとする。（農林水産省告示により産地指定）

2：落花生油かすは特定飼料に指定され、農林水産大臣が指定した指定検定機関（日本穀物検定協会等）で検定を受け、合格を示す表示が付されたものでなければ販売できない。

3. 飼料の有害物質の指導基準（農林水産省畜産局長通達）関係

かび毒、農薬等飼料中の有害物質について基準値を設定し、その基準値を超えないよう指導している。

現在、下表のとおり、マイコトキシン関係では配合飼料中のアフラトキシン B₁の基準値が設定されている。